九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

絵画における自然光利用の有用性に関する研究 ： 自然光を採光した作品展示の実践的考察

岩﨑, 可奈子

https://hdl.handle.net/2324/4110517

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式６－２）

氏　　名	岩﨑　可奈子
論　文　名	絵画における自然光利用の有用性に関する研究 －自然光を採光した作品展示の実践的考察－
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　知足　美加子 副　査　　九州大学　　教授　　伊原　久裕 副　査　　九州大学　　准教授　吉永　幸靖 副　査　　福岡教育大学　　准教授　加藤　隆之

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本研究は、自然光を絵画作品に取り入れる表現の有用性について、芸術実践および光に関する実験によって明らかにするものである。自然光の特徴を生かすことで、人工光にはなし得ない表現が可能であると仮定し、分光解析や SD 法による印象評価等によって実験結果を分析・考察している。

本論は、序論と本文 3 章、結論で構成されている。第一章では、「光と生命感」を表現した申請者の芸術実践について説明されている。また、表象としての光について制作過程と鑑賞時の光の効果について調査している。筆者の絵画作品のコンセプトは、出生前診断による命の選別に対する疑義であり、胎児が感じる光を表現することによって、声なき主体としての命の存在への意識を喚起しようとしている。胎児にとっての微細な光を表現するために、有機物に人工光と自然光を透過させる比較実験を行っている。自然光は人工光に比べ当たり方が均一でありながら、時間経過によって色彩の濃淡に変化を与えているとし、この自然光のもつ「ゆらぎ」が命の表現に有用である可能性を見出している。

第二章では、光の特徴について工学と芸術的側面から文献調査を行っている。自然光の色の波長に対して人工光には欠けているものがあり、この違いが見え方に影響を及ぼし、鑑賞時および作品制作時にも影響があることを提示している。また印象派の先行事例に着目し、自然光の時間の経過と表象との関係について分析を行っている。

第三章では、自然光に関する作品制作と展示方法の実験、および時間ごとの分光分析、印象評価、主成分分析を行い、自然光を透過させる表現形式は、光と生命感の表現について鑑賞者に肯定的な印象を与えることを明らかにしている。

結論として、自然光は絵画における微細な色彩の認識度を高めること。また自然光の時間的変化やゆらぎそのものが、筆者の制作コンセプトである「出生前診断に係る胎児の命」の表現に有用であることを明らかにしている。

審査は、主査および副査：伊原久裕教授、吉永幸靖准教授、加藤隆之准教授によって行われた。審査において、人工光のもとでは色の見え方に欠けが生じやすく、制作と鑑賞に影響があることを明らかにし、自然光のもつ美的可能性を顕在化した点。また変化しやすい自然光が芸術表現の要素となることに着目した点は、芸術実践を行う研究者としての独自性として評価された。公聴会において審査員および参加者からの質問に対して適切な応答がなされ、芸術工学分野の学術的知識と芸術実践能力が認められた。博士論文審査について合格とし、本論文は博士（芸術工学）の学位に値するものとした。